
逢いたくて

鬼羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逢いたくて

【Nコード】
N7168T

【作者名】
鬼羅

【あらすじ】

死んだはずのあの人が生きていた！？
このことを知った銀時、桂、高杉は…！？

第1話（前書き）

鬼羅です。

完全に思いつきからの小説です。

それなら「哀しき夜叉」進めていけよ！っと思うかもしれませんが、

大目に見てやってください。

思いついたら即行動！な自分ではありませんが、よろしく願いします。

多分週に1話か2話くらいの更新になってしまうかもしれませんが

：

第1話

誰にだって大切な人はいます。

それは家族だったり友達だったり人それぞれです。

では、その大切な人が貴方の前から突然姿を消してしまったら？

一度は逢いたいと… 思いますよね？

もし、その大切な人と再び逢うことができるのなら、

貴方はどうしますか？

今の生活を壊してでも、同じ時を過ごしたいと思えますか？

それとも、過去の人だからと切り捨てることができますか？

これからするお話は大好きだったある人に逢いたいと

願い、生きてきた3人が奇跡の再開を果たした物語…。

第1話（後書き）

ありがとうございました！
これからもよろしくお願いします！

第2話（前書き）

ちよっと長いです。

第2話

「おい。出る。」

とある地下牢。

???:「……はい。」

「江戸城」

「来たか。」

???:「お久しぶりですね。いきなり連れてくるなんて…」

「どういふ風の吹き回しですか?」

「とくに理由はない。しばらく外での生活をしてもらおうと思っ
てな。」

「ただし、余計なことを話せば、すぐにあの地下へと逆戻りになる
がな。」

???:「随分と勝手ですね…。ですが、外に出るのも悪くない、行
きましよう。」

「では、しばらく隣の部屋にいるがよい。お主に部屋を貸してくれる者が

もつじき此処に来るだろうて。」

そう言われ、男は黙って部屋に入った

それからしばらくのこと…

「真選組局長近藤勲、同じく真選組副長土方十四郎、参上仕りました。」

「よく来たぞ。今日おぬしら呼び出したのはある人物を真選組に置いてもらいたくてな。」

近藤：「うちに…ですか？」

「そうだ。入れ。」

隣の部屋から男が出てきた真選組2人に近づいてくる。

「では、しばらくの間頼んだぞ。」

幕府の者はそう言って何処かへ行ってしまった。

「……………」

取り残された3人。

土方：「と、とりあえず屯所戻るか、あんたも話すこともあるだろうが」

着いてからでかまわねえか？」

???:「はい、よろしく願います。」

―屯所―

???:「ここが真選組……」

土方：「ああ、男だらけで暑苦しいかもしれねえが我慢してくれ。」

そんなことをいいながら3人が向かった先は客間。

静かな部屋のほうが話しもしやすいと思っただけのことだ。

座り、お茶をすする。

???:「そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名は“吉田松陽”といます。」

しばらくの間、よろしく願います。」

近藤：「そんな硬くならないでください！」

俺は真選組局長近藤勲、こっちは……」

土方：「副長の土方十四郎だ。いきなりで悪いがあなたは幕府の人間か？」

近藤：「トシ。いきなりなにを……」

松陽：「いいえ。私自身、十数年間あそこの地下牢に閉じ込められていた身ですし……。」

土方：「そうだったのか……。」

松陽：「はい。あまり深くはいえませんが……。」

申し訳なさそうに言う松陽。

土方：「いや、こっちこそ変なこと聞いて悪かった。じゃ、広間にも行くか？」

松陽：「あ、はい。」

3人は客間を出て広間に向かった。

近藤：「皆、今日からしばらくの間、真選組で暮らすことになった、」

松陽：「吉田松陽です。よろしく願います。」

近藤：「つとということだ、失礼のないようにな！」

じゃ、今日は飲むぞ！好きに楽しめ！！」

「わああああ！！！！」

隊士たちが喜びの歓声をあげる。

突然の変わりように呆然としている松陽のところに1人の青年がやってきた。

松陽：「あなたは…？」

沖田：「一番隊隊長の沖田総悟でさあ。」

松陽：「総悟ですか。いい名ですね。」

そう言って優しく笑う松陽。

沖田：「…あんた、姉上によく似てますねい。」

小さな声でそう呟いた。

松陽：「…姉上？」

聞こえていたことに驚いたが返事を返す。

沖田：「ええ。さつきみたいに笑った顔とか…。」

どこか寂しそうな顔をした沖田を見て、悪いことをしたと思った松

陽は

それ以上聞くことはなかった。

松陽：「ここは…いいですね。」

沖田：「……？」

松陽：「こうして楽しそうな声を聞いていると、近藤さんがどれだけこの場所を

大切にされてるのがよくわかります。

口では上手く言えませんが家族のように温かいなにかが…。

」

総悟：「そうですかい？」

松陽：「はい。」

それからしばらくの間、酒を飲み、いろんな話しをして楽しんだ後、用意された部屋にいた松陽。

松陽：「私はなんのためにここに…。ここにいればあの子達に会えるのか…」

第3話（前書き）

長いですが、そして話し適当…笑

第3話

―万事屋―

新八：「おはようございます。」

朝の8時頃、万事屋のツツコミ担当ダメガネである新八がやってきた。

あいさつはしたが返事が返ってくることはない。

新八：「まだ寝てるよ…神楽ちゃん、起きて、朝だよ。」

そう言っつて神楽の寝ている押入れの襖を開ける。

神楽は宇宙最強の戦闘種族、夜兎族の生き残りだ。

押入れの襖を開けた後、新八は銀時が寝ている和室へと足を進める。

新八：「銀さーん。起きてください。」

銀時：「ん…あと5時間…」

新八：「なに馬鹿なこと言っつてんですか。」

寝てる暇があるなら仕事探してきてくださいよ。もうお金ないんですから。」

銀時：「わあってるって…朝飯食べたらどうするか考えますよ。」

新八：「絶対ですよ？」

銀時：「おお。」

やる気のない返事にため息をはきながら和室を出た。

2度寝している神楽を起こして台所へと向かった。

あんなマダオでも攘夷戦争に参加した過去があるらしいが信じられない。

朝食を食べ終えた2人はいつものことから部屋でゴロゴロ。

新八は1人で部屋の掃除をしている。

新八が掃除を終え、一息ついたところで電話がなった。

一番近くにいた銀時が受話器を取る。

銀時：「はい、もしもし万事屋ですけど。今日は定休日なので明日にでも電話して…」

新八：「何してんだクソ天パー!!!」

そう言っ て銀時の手から受話器を取り上げる。

新八：「すいません！お電代わりました。で、今日はどのような？
…はい。じゃあ後ほど。」

神楽：「なんだったアルカ？」

新八：「屋根の修理をして欲しいって…。」

銀時：「修理って…俺等じゃなくてもいいじゃねえか。」

依頼を断ろうとしていた銀時が口を挿む。

新八：「それが、5人ほど雇っているらしいです。ただ、今日は体
調崩して2人がお休み

してしまっ たみたいで、最低1人でもいいんで来てくれな
いかということですよ。」

簡単な説明を終えると、

新八：「問題なのはここからです。」

神楽：「誰が行くかってことアルカ？」

神楽の問いに新八がうなずく。

銀時：「あの…あれだ。めんどくせえからジャンケンで決めろぞ。」

新八：「そういうのは銀さんが行くべきですよ。」

仕事探す手間も省けたしいいじゃないですか。」

銀時：「なに言ってやがる。それとこれとじゃ話しは別だ。

真剣勝負な、行くぞ。ジャーケン…」

「いつてらっしやい。」

2人に見送られ依頼主の元へと向かうことになってしまった銀時。

銀時：「つたく…んで俺が…つーか前にもこんなことあったような…。」

ブツブツと文句を並べながらも目的地にたどり着いた。

銀時：「万事屋です。お電話いただいて参りました。」

依頼主：「ああ、銀さんか…悪いねえ、じゃあこれに着替えて来てくれるかい？」

屋根の上から顔を出し、下りてきたのは依頼主。

作業着を差し出すと再び屋根の上へと戻っていつてしまった。

銀時も渡された作業着を着てそのあとを追う。

屋根の修理は初めてではないため、渡された道具で作業を始めた。

銀時を送り出した新八と神楽はと言うと…。

新八：「神楽ちゃん、定春連れて散歩にでも行かない？ 晩ご飯の材料も

買つとかないといけないし…。」

神楽：「そうアルナ。じゃあ定春呼んで来るアル！」

万事屋を出て、散歩ついでに買い物に行くことになった2人はスーパーへと向かっていた。

しばらくして、

神楽：「あれ、真選組じゃないアルか？」

数m先の甘味屋で団子を食べている真選組を見つけた2人。

新八：「ほんとだ、近藤さんに土方さんに沖田さん、…あれ？ あんな人いたかな…。」

神楽：「知らないアル。」

気になった神楽は真選組のいるその店へ早足で向かった。

近藤：「おい、ありゃ、万事屋のとこのチャイナ娘じゃないのか？」

最初に気づいたのは近藤だ。

沖田：「本当ですね…チャイナに眼鏡…あり？旦那がいやせんね…」

土方：「そのほうがいいじゃねえか。」

沖田：「そうですか？俺は少し残念な気もしますがねえ。」

残念そうに土方を見る。

土方：「そりゃどーという意味だコラ。」

神楽：「お前らの話はどうでもいいネ、サド！その団子1つ欲しいアル。」

新八：「ちよつと神楽ちゃん！すみません沖田さん。」

それより、こんなところでお会いするなんて、珍しいですね。」

土方：「そーいやそうだな。」

新八：「…あの、会ってすぐになんなんですけど、

そちらの方は？真選組のお知り合いですか？」

土方の横に座っている男を見る。

松陽：「吉田といいます。訳があつて真選組に住ませていただきます。

今はこの街を案内してもらつていたところですよ。」

新八：「そうだったんですか、ああ、僕は志村新八です。こっちは神楽ちゃん。」

松陽：「新八さんに神楽ちゃんですね、よろしくおねがいます。」

新八：「いえ、こちらこそ、また街で見かけたときは声かけてくださいね。」

じゃ、失礼します。神楽ちゃん。行くよ。」

沖田と格闘技をやり始めた神楽を引きずるようにしてスーパーへ向かった。

第3話（後書き）

こんな駄目文を読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

第4話

銀時：「たでえま〜。」

夜になって仕事に出ていた銀時が帰って来た。

新八：「おかえりなさい。今晚ご飯作りますね。」

銀時：「おお。」

神楽：「銀ちゃんお帰りネ！お金いっぱい貰えたアルカ？」

銀時：「珍しくな。つか、んでそんなご機嫌なの？」

いつもより笑って話かけてくる神楽を見て疑問に思った銀時。

神楽：「今日甘味屋の前を通ったらネ、マヨやサドと会ったアル。」

そこでヨッシーと友達になったアルヨー！！

銀時：「は…？ヨッシー…？マリオの…？」

新八：「あははは。違いますよ。」

実はですね、真選組で今隊士じゃない男の人が住んでいるんです。

その人が神楽ちゃんの言うツッシーで、吉田さんって言うんだそうです。

灰色みたいな髪の色をしていて、長さは桂さん位かな、

すごく優しいそうな人で、神楽ちゃん気に入ったみたいなんです。」「

銀時：「へー。」「

神楽：「だから銀ちゃん！！明日一緒に真選組のどこに行きたいアル！！！」

銀時：「一緒につて…やだよ、めんどくせえし。」「

神楽：「いやアル！銀ちゃんにも会ってほしいアル！！！」

どうしてもと言う神楽に銀時は、

銀時：「ったく、行きゃいいんだろ？」

その一言でよりいつそう笑顔になる。

神楽：「本当アルか！？絶対ダヨ！？」

銀時：「わあったから。」「

新八：「銀さん。ご飯ここに置いておきますね！」

じゃ、僕は帰ります。明日の当番は銀さんなんで、寝坊しないでくださいよ!」

銀時：「おー。気をつけて帰れよ。」

新八：「はい。お休みなさい。」

ー次の日ー

沖田：「あれ？旦那じゃねえですかい。珍しいですねい、

3人でこんなところに来るなんて、なにか用ですかい？」

たまたま入り口付近にいた沖田を呼びとめた銀時は、

ヨッシーこと松陽に会わして貰おうと思っていた。

神楽：「お前はお呼びじゃないネ！ヨッシーは何処アルカ？」

沖田：「ああ、そういうことですかい。」

あいにくだが、近藤さんか土方さんの許可がなきゃ、会わせられねえんでさあ。」

神楽：「めんどくさいことするアルナ。」

沖田：「そう言つな。…つてことなんで、帰ってもらえますかい？」

神楽：「それは無理ヨ。ここまで来たんだから。」

沖田：「…しかたねえ。近藤さんは今出てるんで、土方さんにも聞いてきませう。

旦那方は客間にでもいててくだせえ。」

新八：「なんかすみません。沖田さん。」

沖田：「別に…それじゃ、またあとで呼びにきませう。」

山崎に客間へと案内され、出されたお茶をすすり、煎餅を食べ、息ついたころ。

新八：「吉田さんに会うだけでこんなに時間がかかるなんて思いませんでしたよ。」

神楽：「ほんとネ！！なにやってるアルカ！！」

銀時：「別にいいじゃん。こうしてのんびりできてんだから。」

1人のんきに煎餅を食べ続ける銀時。

しほはくすゆるよ、

山崎：「旦那、副長がお呼びです。3人も来てくれとのことですが案内しますね。」

銀時：「ああ、わりいな。」

山崎：「いえ、こちらこそ、待たせてしまつて…」

あ、この部屋です。どうぞ。中に吉田さんもいます。」

銀時：「そうかい。ありがとよ。」

新八と神楽は先に部屋に入っていた。

スウツ

銀時：「邪魔するぜ。」

土方の横に座っていた松陽は神楽と話をしていたが、

銀時が入ってきたことで一度顔を上げた。

2人：「……………え？」

目が合う。

予想を超えた出来事にただ立っていることしかできなかった。

第4話（後書き）

なんかわかりずらいですね…

感想お待ちしています…！ありがとうございます…！

第5話（前書き）

テストで更新遅くなりました！！すみません！！！！！！

そのあともしろいろあつて今別のパソコンからやってます。

週に一回の投稿どころか最後まで続けることもできなくなるかもし
れませんが、

宜しくお願いします！！！！！！

第5話

もう一度逢いたいと…何度思ったことだろう。

狂ってしまいそうなくらい何度も何度も願いつけた。

「松陽先生。」そう呼びたくて

もう一度、与えてくれたこの名を呼んでほしくて…

新八：「銀さん??」

立ったまま動かない銀時に新八は声をかける。

だが、今の銀時にはそんな声聞こえていない。

松陽：「銀時…なんですね？」

突然名前を呼ばれ、肩をすくめる銀時。

銀時：「松陽…先生。」

小さな声でその名を呼ぶ。

あまりの出来事に顔を見ることができず俯いたままの銀時。

その様子を見た松陽は立ち上がり、銀時と正面から向き合う。

松陽：「大きく…なりましたね…。」

そつと頭に手をやる。

銀時：「…やつ、」

その手を振り払う銀時。

松陽：「銀時…？」

銀時：「…うそ…。生きてるはずがない…。先生は…あの時死んだんだ…」

……………幕府のやつらが……………！！！！！！」

松陽：「銀時！！！！」

頭を抱えながら「うそだ。」と繰り返す銀時。

そんな銀時の変わりように新八、神楽、真選組のメンバーは目を白黒させている。

松陽は目の前でパニックを起こしている銀時を見て、

話を続けることは不可能だと考え、首筋に手刀を入れ、気絶させた。

その状況をいち早く理解できた神楽は慌てて銀時のそばへ駆け寄った。

それに続き新八も銀時のもとへ向かう。

新八：「銀さん！！大丈夫ですか！？」

神楽：「銀ちゃん！！……………お前！！！！銀ちゃんに何したアルカ！？」

先ほどまでヨッシーと呼び、話していた姿はどこへやら。

怒りの眼を向け。松陽に問う。

松陽：「心配いりませんよ。疲れていたようですからね、少し眠ってもらっただけですよ。」

10分ほどしたら目を覚ますでしょう。そのときに詳しくお話しますね。」

神楽の頭を撫でながら言った。

なぜか哀しそうに笑いながら。

ー15分後ー

銀時：「……………んっ……………」

2人：「銀さん/ちゃん!!!!!!」

銀時：「…あれ？俺なんでこんなところで寝てたんだ？」

神楽：「覚えてないアルカ？」

銀時：「ああ。なんとなくは覚えてねえこともない…。」

神楽：「銀ちゃんヨとヨッシーと逢っておかしくなっちゃったネ。

だから眠らせたって言ってたヨ。」

銀時：「なんか心配かけたみたいだな…。」

神楽の頭を撫でていると、

松陽：「目を覚ましたようですね。銀時。」

隣の部屋から松陽が出てきた。

銀時が目を覚ましたとき、また同じようなことになっては困るとい
うことだ、

目を覚ますまでの間、ずっと隣の部屋にいたのだ。

銀時：「本当に……先生ななんですか？」

松陽：「ええ、先ほどは混乱させてしまいましたね。すみません。」

あんな形で再会するとは思ってなかったものですから。」

頭を下げる松陽。

銀時：「そんな、頭を上げてください。」

それと、これだけ聞かせてください。

なんで……今になって……俺だけじゃない、

あいつら2人がどんな思いで生きてきたか……！」

松陽：「銀時……。」

銀時：「今、目の前にいる先生が本物なら、

あのとき起きたことはなんだったんですか!？」

松陽：「……………」

銀時：「あのとき……あの瞬間起きたことは……先生の首が飛ぶところ

も、

離れた胴体を学舎と一緒に燃やされたところも見た!!!!」

「……………!!!!!!」

その言葉に驚きを隠せない新八や神楽、後から入ってきた土方や沖田も同じだ。

松陽：「そのことについて話をしようと思います。」

ですが銀時？ここにいる人たちは皆、お前の過去を知りません。

辛いでしょうが、協力者が必要となったとき困るでしょう？

話ではくれませんか？私も一緒です。」

この後、銀時の口から語られる話は、新八たちの想像をはるかに超えた

辛く、苦しく、時にあたたかい鬼と呼ばれた彼の記憶。

銀時：「…………俺はー！。」

第5話（後書き）

長くなりましたがありがとうございました！

第6話（前書き）

なんとか書けました!!!

宜しく願いします!!!

一応語りは銀時…のつもり……

第6話

「鬼が…、この村に鬼が生まれたぞ!!」

「なんの冗談だ!? 人から鬼が生まれるなど……。」

「冗談じゃないらしいぜ、なんでもその赤ん坊、

銀色の髪に紅い瞳を持って生まれたとか……。」

小さな村のはずれに古い家が一軒、俺はそこに生まれた。

今じゃ普通だが、天人が来てすぐの時代、黒髪に黒い瞳が当たり前だった。

そのため、俺は物心がついたころから母親は目も合わせてくれない、父親には暴力をふるわれ、村の連中からも鬼と呼ばれていた。

名前を与えられてもいなかったためか自分でも本当に人間なのかわからなくなっていた。

そんなある日。

「おい!! いつまであの鬼を住ましておくつもりだ!!」

「なぜあの時殺さなかったんだ!!」

「さっさと捨ててしまえ!!」

母：「私だって好きであんな鬼家に置いてるわけじゃないわ!!」

今すぐにも捨てて行きたいくらいよ!!」

「ならさっさと捨てに行けばいい話だろう!!」

母：「勝手なこと言わないで!!祟られたりしたらどうするのよ!!」

物置部屋のような汚い部屋にいた俺は家の入り口での話しを全て聞いてしまった。

話をしているやつらも隠すつもりはないだろうが…

とにかく、様子を見に、俺は入り口に近づいた。

村のやつらは気づいていない。

「おい、今更だが、あれは本当にお前の餓鬼か？」

母：「冗談言わないで!あんなの私の子じゃない!!人間でもないわ!

人の姿をした鬼よ!!」

「っふ、どうだかな…だいたいつ…!!」

村のやつらがなにも話さなくなった。

母：「……………」

母親はひとりが指さした方向を見た。

その先は……………鬼と呼ばれた俺。気づかれた…。

俺を見るやつらの顔は青ざめ、その場から動こうとしない。

いや、動けないでいた。

俺はそんなやつらを見殺しにして、母親のもとへ近づいた。

だが、

バシッ、

ドサッ

母：「近づかないで！！」

そう言っただけで俺を突き飛ばした。

体制を崩して仰向けに倒れた俺をさらに母親は蹴り飛ばした。

それを見た村の連中も家の中に入り、殴りかかってきた。

「今だ！！押さえとけ！！！」

「一気にやっちまえ！！！」

ボコツ、ゴキツ。

大人数人に殴りかかられたとなるとさすがに意識が朦朧とし始めた。
もう死んでしまったほうが楽だろうかと思ったそのときだ。

グイ。

母親に着物の裾を引っ張られた。

そのまま俺を抱きかかえるようにしてさっきまでいた大人たちの横を
すり抜け、村を出た。

たどり着いた先は……………

薄暗い戦場だった。

第6話(後書き)

もうむちゃくちゃですね…

ありがとうございました…!

第7話（前書き）

引き続き、松陽と出会う前の銀時のお話です。
よろしくお願ひします!!

第7話

銀時：「ねえ……」じつて……。」

母親：「今日からここで暮らすの、

あたしは荷物を取りに村へ帰るから待っててくれる？」

銀時：「ほんとに帰って来てくれるの？」

母親：「……………」。

何も言わず、俺に背を向けて村へ帰っていった。

当たり前だが、母親が帰ってくつることはなかった。

ついに捨てられたんだ。

悲しいなんて気持ちはなかった、ただ、捨てられたんだと、

自分はこの場所で死んでいくんだなと思った。

もう二度と人を信じたりするものか、いつか裏切られ、捨てられる
くらいなら、

最初からなにももらえない。独りのほうがマシだ。

餓鬼だった俺はそんなことを考え、人から遠ざかり、鬼になった。そうして刀を振りまわし、向かってくる人間を斬り続けるうちに、ある噂が流れ出した。

？戦場に屍を食らう鬼がでる

最初はなにを言っているのかわからなかったが、人間共が俺を見て逃げえて行くとき、必ずその言葉を口にしていたため、俺のことだったんだと理解した。

それから「屍を食らう鬼」になった俺を殺そうとするやつらが
続々と戦場に姿を現した。

おそらく俺を殺したあと褒美でもとのことだろう。

俺は殺されないために向かってくるやつを斬っていった。

いつ死んでもいいと思ってはいたけど、

自分より弱いやつには殺されなくなかった。

殺したやつにたまに入っている握り飯を取り出し、食べる日々。

傷を負っても手当てなどする場所もなく、酷くなるばかりだった。

そんな血生臭い世界、普通の人間は近づきはしない。

来るのはどこかの武士とか言う奴らだけ。

そういう人間はどいつも同じような眼をしていた。

人間を見る眼なんかじゃない。

鬼を、化け物を見る眼。

やっぱり俺は人間なんかじゃなかったんだ。

第7話（後書き）

ありがとうございました！！

第8話（前書き）

お久しぶりです！！！

めちゃくちゃですが、宜しくお願いします！！

第8話

―とある村―

「おい、知ってるか？この近くの戦場に…でたらしいぜ？」

「でたつて…なにがだよ？」

「お前も知ってんだろ？例の銀髪紅眼の鬼だよ。」

「本当かよ…おっかねえな。ここの村にや来ねえんだろっな？」

「知るかよ、鬼の考えることなんざ。」

その話を聞いたある男がいた。

？：「その話、詳しく聞かせてもらえませんか？」

「……………！！……………先生っ！！」

？：「私が、その鬼を退治してきます。」

― 戦場 ―

銀時：「ツチ、今日はこれだけか……。」

当たり前となった毎日。

生きるか死ぬかの世界でしかない。

銀時：「あう、…ング、んぐ………うええ、血の味がする。

…まあ、いいか。」

周りには死体しかないこの場所で呟きながら食べ続ける。

このときは食べるのに夢中で油断してた。

食べようとした瞬間、

ガシッ。

いきなり頭を掴まれた。

驚きのあまり顔をあげると、長髪の男が俺を見下ろしていた。

松陽：「屍を食らう鬼がでると聞いて来てみれば…君がそう？」

……またずいぶんと、かわいい鬼がいたものですね。」

銀時：「…！！（なんだ？こいつ…かわいい??）」

松陽：「刀も屍それから剥ぎ取ったんですか。童1人で屍の身ぐるみをはぎ、

そうして自分の身を護ってきいたんですか。」

持っていた刀を抜き、構えた俺をみて、そいつはフツと笑った。

松陽：「たいしたもんじゃないですか…だけど、そんな剣、もういりませんよ。」

銀時：（……?）

松陽：「人に怯え、自分を護るためだけにふるう剣なんて、もう捨てちゃいなさい。」

腰にさしていた刀を鞘ごと引き抜き、俺に投げてきた。

松陽：「剣そいつのの本当の使い方を知りたきゃ、ついて来るといい。

敵を斬るためではない、弱き己を斬るために…己を護るのではない…、

己の魂を護るために……。」

銀時：「……。（なんなんだ？）」

なんで俺なんかに声をかけたのか不思議だった。

でも、久しぶりに人と話げできたのが嬉しかったからか、考えなしについていった。

このとき、あの人のもとへ行かなかったとしたら、俺はどうなっていたんだろう。

第8話（後書き）

ありがとうございました！！！！

投稿遅くなるかもしれませんが、よろしく願いします！！

感想まっています！！

第9話（前書き）

お久しぶりです！！！！！

あと一週間後にテスト、そのまた一週間後にもテストがありますね。
頭悪いと苦労しますね。

それでは、文章は相変わらずですが、よろしく願います！！

第9話

松陽：「着きましたよ？」

銀時：「…………ん……。」

あの後、落ちていた刀で足を切ってしまった俺はこの男におぶられ、不覚にも眠ってしまった。

体のどこかを切るなんてよくあることだった。

だから最初はいやだと言ったが、大丈夫じゃないだとかなんとかでおぶられることとなった。

人に背負われるのは初めてだった。

今まで目も合わせてもらえなかったから。

そいつの家に着いたのは夕方くらいだった。

俺の生まれた村と同じくらい小さな村。

あの村に帰ってきたような気がして、隠れるようにそいつの家に入った。

松陽：「ゆつくりしていつて下さいね。ここには私以外の人間は住んでませんし、

安心していいんですよ？あと、お腹が空いているでしょうけど、

まずはその体を綺麗にしましょうか。」

銀時：「……？」

松陽：「ふふ、お風呂ですよ。一緒に入りましょうか。」

銀時：「……………」

俺が何も言わずにいと、その人は俺の手をひいていつてくれた。

バシヤア。

こんなあつたけえお湯かぶつたのはいつぶりだ？

石鹸でこするたびに肌にごびり付いた泥を落としていく。

何度も何度も洗い流し、ようやく白い泡へと変わった。

全て洗い終わり、2人え湯船へ。

松陽：「はあ。気持ちがいいですね。」

銀時：「…うん。あったかい。」

松陽：「そうでしょう？あがったらご飯にしましょうか。」

銀時：「うん。」

風呂から上がると、さっきまで着ていたものとは別のものを着せてくれた。

松陽：「さっき着ていたものは洗っておきますね。今はこれを着てください。」

私があなたくらいのおきに着ていたものですし、大きさ的には問題ありませんね。

それじゃ、支度をしてきますから、少し待っていてくださいね。」

そう言って台所へと姿を消した。

しばらくすると、今まで見たこともないようなものが、目の前のたうさん並んだ。

だが、それは銀時くらいの年の子どもなら当たり前のようなものばかり。

松陽：「さて、簡単なものしかありませんが、食べましょうか。」

銀時：「え、ああ。」

松陽：「じゃ、いただきます。」

銀時：「…い、いただきます。」

箸の持ち方なんてわからなかったからただ握っているだけだった。

とにかく腹が減ってならなかった。

野菜を煮たものが目の前にあったので、一口食べてみた。

銀時：「…！！うめえ！！なんだ…これ！」

松陽：「喜んでもらったのならそれが何よりです。おかわりならありますし、

好きなだけ食べてください。」

銀時：「いいの？」

松陽：「はい。…そういえば、名前をまだ言ってませんでした。

私は吉田松陽といいます。あなたの名は？」

銀時：「……………」

こんなタイミングで聞かれるとは思ってなかった。

銀時：「……………ねえよ……………」

自分でも信じられないほどの小さな声。

銀時：「今までは鬼とか化け物とか、そんな風にしか呼ばれたことねえ。」

松陽：「……………」

なんで何も言わねえんだ？何か言えよ……。

銀時：「ま、こんな髪や瞳の色してるやつなんて普通じゃねえし。」

それに、本当に人がどうかもわからねえ。」

ちよ、口が……こんなことわかってもらえるわけないのに。

銀時：「あんだだって気味悪いとか思ってたんだろ？」

俺は飯食いにきただけだし、この村の奴等にはバレないよ
うにする。

だからもう少しー。」

バツ。

銀時：「……………な……………」

言いたいことを言い切る前に抱き寄せられた。

松陽：「鬼なんかじゃない、髪や瞳の色の違いなんてどうでもいい

じゃないですか。

本当はずっと誰かのそばで笑っていたかったんでしょ？

ずっと、こうしたかったんですね？」

俺を抱きしめたまま頭を撫でてくれる。

その優しさに思わず涙が零れ落ちた。

松陽：「我慢しないで、泣きたいときは泣いていいんですよ？」

その一言で今まで耐えてきたものが一気に溢れ出して止まらなくなった。

銀時：「うっ。…うえ…ヒッ、うううわわわあああ！！！」

叫ぶように泣いた。こうして泣いている間もずっと背中を撫でてくれる。

松陽：「大丈夫。あなたはちゃんと笑うことだって今みたいに涙を流すことだってできる。」

それに。私は初めて見たそのときから、あなたの髪と瞳、綺麗だと思っていましたよ？」

銀時：「…ヒッ、ほんと？」

松陽：「はい。」

優しく笑って返してくれる。

人間なんて信じないと思っていたのに…

あの人は俺のほしかった言葉くれる。

生まれて初めて、人を信じてみたいと思ったんだ。

第9話（後書き）

久しぶりに長めです。

今回は、特別編として、銀時の誕生日のお話を書いてみました。
今日中に投稿しますんでそちらのほうも見てやってください!!

特別編（前書き）

本当は明日に投稿したかったんですが、時間がないので今日にしました！！

残念？なことに次に投稿できるのは年明けになるかもしれない！！それが無理なら4月とか…

ほんとすいません！！

連載自体はやめるつもりはありませんので、これが最後と思わないでください！！

「哀しき夜叉」は今日書けなかったんでそれも年明けになるかもです。

高校生になったら絶対戻ってきます！

それまで待っていてください！！

松陽：「ふふ、良かったらケーキ作るの手伝ってもらえませんか？

それと、あなた達が今住んでいる家で祝ってやりたいんですが…。」

遠慮気味に言う松陽。

新八：「全然いいですよ。あ、そうだ！銀さん今ちようど出かけてますし、

今のうちに知り合いですぐに来れるような人に声をかけて

みんなでお祝いしましょうよ！！」

松陽：「それはいいですね！！それじゃ、お邪魔させてもらいますね。」

私が作ってる間はそのお知り合いの方に連絡のほうお願いしますか？」

新八：「はい。銀さんも夕方くらいには帰ってくるんで、

それまでがんばりましょう！！！」

そうして急ながらも銀時の誕生日パーティーの準備は始まった。

しばらくすると、一階に住んでいるお登勢やキャサリン、たまが手伝いにやってきた。

新八や松陽の手伝いを、神楽はお登勢らと部屋の飾りつけをし、
なんとか夕方までには間に合わせることができた。

準備が終わるとともに、万事屋にはたくさんの方がやってくる。

お妙に九兵衛、長谷川や月詠に日輪、晴太、さっちゃんという人達。

新八：「あ、姉上！！すいません急で…僕も少し前に聞いたもので
…。」

お妙：「いいのよ。ただ…あまりに急だったから、これくらいしか
用意できなくて…。」

そう言って可哀相な玉子を新八に差し出す。

新八：「あ、あはは。それはあとで銀さんに渡してあげてください。

九兵衛さんも来てくれたんですね！急なところすいません。

」

九兵衛：「それはかまわないさ。僕のほうこそ今日は呼んでくれて
嬉しかった。」

誕生日会なんて初めてだ。」

新八：「え、そうなんですか？」

九兵衛：「ああ。だからプレゼントなんかはなにを用意したらいい
かわからなくて

近くにあつたボンレスハムしか用意できなかった。」

新八：「いやそれでじゅうぶんですよ。ゆっくりしていつてくださ
いね。」

晴太：「おーい!!」

新八：「あ、晴太くん!!来てくれたんだ!!」

晴太：「うん。銀さんはまだ帰ってこないの?」

新八：「もう少ししたら帰ってくると思うよ?ケーキとかもあるか
ら楽しみにしててね。」

一通り話しを終え、6時を過ぎたころ。

ガラガラ。

銀時：「たつでま。」

銀時が帰ってきた。居間にいるものたちはクラッカーを持ち銀時を
待つ。

新八や神楽は不自然にならないようお出迎え。

新八：「銀さん、お帰りなさい。」

神楽：「お帰りヨ。」

銀時：「おお。って…なに？」

銀時の袖を引っ張り、銀時を連れて行く2人に対し、なにがなんだかわかっていない銀時。

ガラッ

パン、パン

「銀さん！！誕生日おめでとう！！！！」

銀時：「…………え…………。」

新八：「なに突っ立ってんですか、銀さんのために用意したんですよ！！」

神楽：「そうアル、甘いものもいっぱいネ！！これ私からのプレゼントアル！！」

ありがたく受け取れヨ！！！！」

そう差し出されたのは酢昆布だ。

銀時：「…………ふッ、ありがとよ。」

神楽の頭をくしゃくしゃと撫で、松陽のもとへ。

銀時：「先生だろ？この話の始まりはよ。ありがとな。」

松陽：「私もここまで沢山の人達が集まるとは思いませんでした。」

たくさん仲間と呼べる人たちがいるんですね。嬉しいんだか、寂しいんだか…。

まあ、今日はたくさん食べて、楽しんでください。」

銀時：「ああ、そうさせてもらうぜ。」

松陽から離れると、銀時は沢山の人に囲まれて話をしている。

そこには松陽の見たことのない銀時の顔が幾つもあった。

松陽：「あんなふうに笑えるようになったんですね。」

「誕生日、おめでとう。銀時。」

特別編（後書き）

ほんと適当ですー！
なにが言いたかったのか…。

それでは、しばらくの間さよならですが、
気が向いたら読んでやってくださいー！ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7168t/>

逢いたくて

2011年10月10日14時12分発行